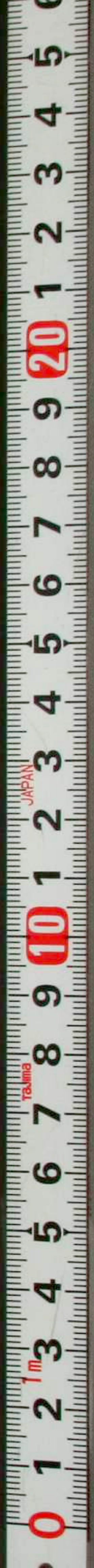


畫像
十三詣

奇談算草成



特
遠 13
968
5



門 遠 15
號 968
卷 5

本清

繪本蕒草紙卷之五

自害身義士全信
靈看體愚子轉智

玉泉堂膽丸戲編



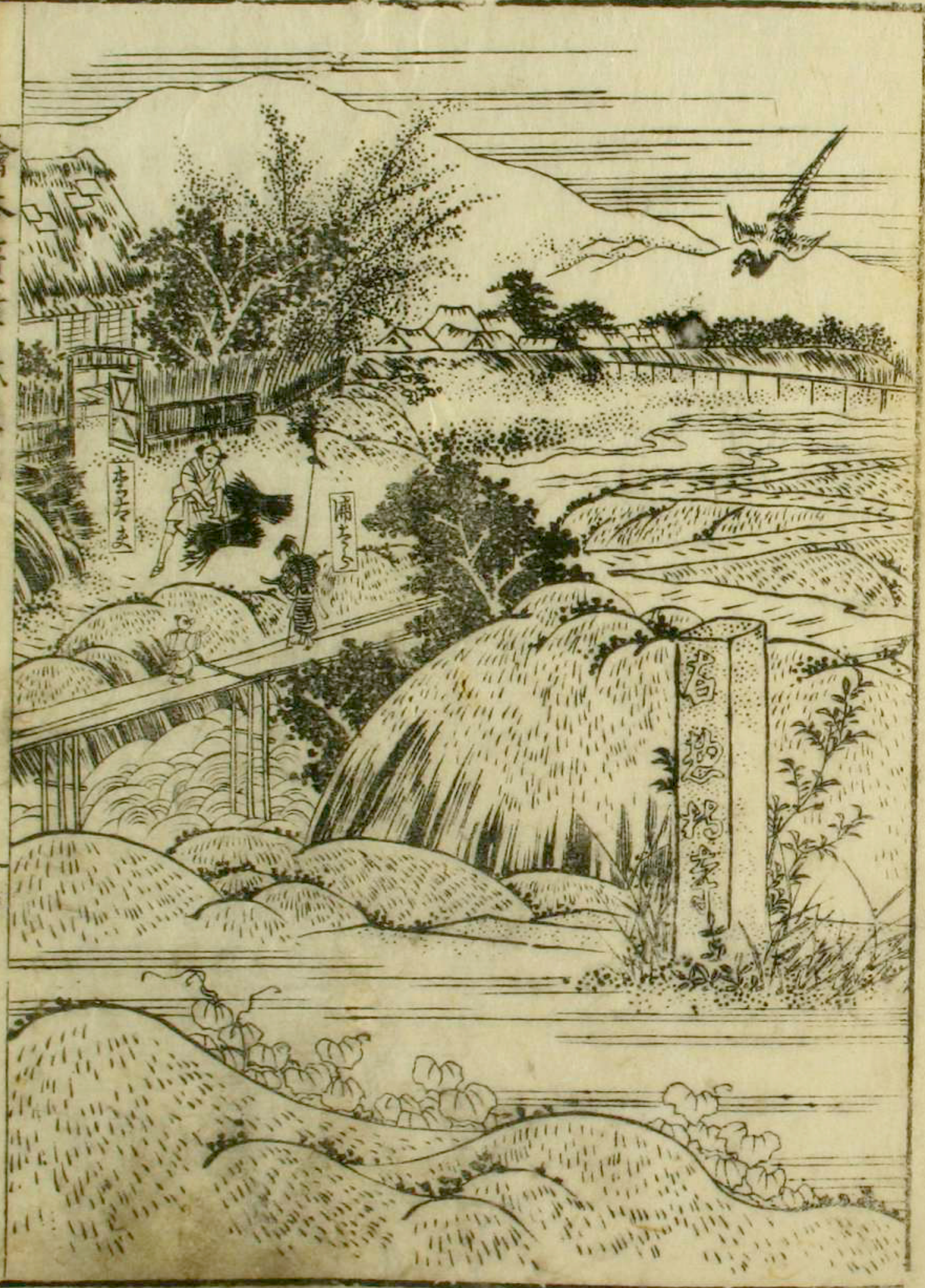
朱子曰人物並生於天地之間本同一理而稟氣有異焉稟其清明純粹之氣則為人稟其昏濁編駁之氣則為物と云り於人有賢愚異者是又清明昏濁之氣所為乎爰有高濱松太夫ハ娘也儀と長品有り將て身價と得るの歸りて三國時ハ賊難一逢ひ既て身を亡さんとて折りて一人の獵人金子とけくるひ一人乃男子と委ねぬと將て歸りつ守袋と見るに

言語同断是娘沖津の分婉一浦大良にして井関十内の胤之りとを
 大不審死其後密に播磨の性く這首彼首と聞正を以十内ハ妻梶子と
 五十拙左門の爲一害せしれ沖津ハ行方なくかりしと聞て頼る
 かりひぬもバツと中此小児と守立敵と討せんりのとと思ひぬも
 昼夜此妻との心とすとのども只貧窮し逼りていへども詮を
 かく其後二年と経く三人とも撰易惣持寺此辺に膝を入るばりの
 小屋とあつゝひ老女籬ハ茶と煮て往來少少銭と求め或ハ他一雇
 せして洗濯物縫まど一松太夫ハ山に往て柴と熊り少しれ價を以て
 世を送るにゆるる宿業のあつゝつゝ所もや浦大良今歳十六才
 一至此と之ども六七才の小児あを芳りて物讀りの書支ハ扱置つ飯
 の戯とあも土人形とりて傀儡師とまひび或ハ往來の婦女子の後

一 行て裾をかぎて掌と拍て笑ひるど古今未曾有の愚蠢るれば夫婦
 の者ハ是と氣疎と事に思へども流石思愛の締捨を諺も籬
 支の子を知慈愛の弥増りのとて養育等閑かごりり或日
 籬ハ近在の家より雇女の入りあつゝ未明より出行ぬに松太夫
 ハ脊戸辺より出て柴薪の長と折或ハ縄りて結びるど折即
 羽音乃く一居の鷹雉子と引組むるより落すと浦大良有
 合柴と取て是と打り水道り今當り人鷹ハたちち死して
 雉子ハ逸もて飛去ぬ松太夫是と見てる嗚呼する夏とせりの
 くれ平常の痴漢く似も活るる手練りか引上見るにさつ小
 足革附一物の大鷹るれば大驚と是正しく國の守の鷹る
 べ一今直り其主の来玉ひく罪と正しひるに如何言べや迎

只管胸打さうだう越超し外の方に一固の丈夫身の粧ひ立派に出入り
 手に陣笠と携へ馬手小策と持て夫と入り鷹の死にたつを見て
 大に驚れ是はち國守御秘藏の一物何處か尋止とせしど
 敦圀わくと浦太良呵くと打しひつ官途公さるる怒り玉ひて己
 常し聞ふ鳥肉も臭肉も味ひ勝まうとあんそれ折とり肉
 鳥の肉と喰ひんとありとも翁爺是とゆき玉ひば今日幸
 此鳥と得ぬもどあのを料理のしして官途公あを参らせしめ
 とつて丈夫りり怒りてつてこの這廝何更とつて國守の御
 秘藏ある鷹を殺しとて有る某以肆りて嘲哂とて段その罪
 免しがうと汝と將る某が罪と謝せん疾来とてと備准とん
 繩りて既と相んととてと松太夫其裾を扣へ泪ととてと流

て只今の雑言行状詫奉るやもゆりばたは彼と割しあるさ
 とも君の心は足は更はゆり老人が頼ひ一應聞せられ下され
 彼全く令即と肆りやあゆりほど彼當年十六に罷成ゆりども
 未六七才の小兒あも劣り愚蠢とて尊卑は差別ハ扱置物中
 まどま存じ御覽の如く斯中内も熟睡しし程痴漢
 ゆり何更も取らざる去り御鷹を殺せ答ハ御身に
 あらびきさん彼が身の代りとして老人が命召よられ下され
 と摩挲て頼むに壯士が座に居てつて諾所愚蠢とつて
 ハ取ら足らば去る某ハ是今日今恭の奉公始なり秘藏の
 鷹を殺されぬも所全御手討し逢ぬとて武士の一命惜し
 つつざれども子細あつて一の事と果はすてハ我命我りの



繪本實業草紙卷五



繪本實業草紙卷五

と乞て則今日此光景に及びぬとて抑播あての辨より沖津の
 命長品よりして磯辺と伴ひ浪花に乗りしを更けしつて
 浴もろく語るに松太夫ハ只呆も呆もて扱ハ沖津ハ死
 てゆいぬるよと泪あぐり語るハ此愚蠢浦太良とす
 則千内殿の胤ゆして今君の仰らるぬ沖津の分悦し子て
 そハ守袋に書付りて是と知ぬ夫よりして密に播あて
 間借ひぬふ事たりハ五十拙左門権子の兩人るハ何と
 浦太良と人との敵と討せぬとんと貧窮の中に養育し人
 せしに言語同断たぬ稀る此痴漢に始と力と大に侍る所
 神佛の應護るべき丹誠と抽出て神に祈り佛に誓ひぬ
 いるる過去の宿業りやかりの靈験とてなきて

しに不意も今日只今令郎不巡り逢ぬる心ざん敵ハ同ト兩人ふゆ
 ハ今某相果るとも心ざん雲とわん娘といひ孫にやで令郎の御
 恩に預りぬるも宿縁と思召も敵あ出合あるべきせめて一太刀
 此痴漢も悪と晴させたりハ催馬某と扱て令郎の罪と償ひ
 玉りてと両手と脊小わり面とて友之助是と押しめら君ハ今
 某が為小阿翁公とてゆと何条扱めゆらん固辞とハ尤も
 つとども沖津磯辺の兩人ハ我家と出る其日より音信不通と誓ひ
 めれ親も子もを況ハ阿翁の名ハ何れハ互小猶珠
 ゆくとしてせらり望とくとも友之助ハ更ハ是と諾せぬハ互小猶珠
 表の方其兩端某計ひやさんとして矢と入る人を見ふ是も
 友之助と同一打粉も陣笠脱捨座に付と友之助是を見

則今日の同役鷹匠の一人るれば一大事と洩聞し曲りの時宜
 たりてハ討果さんと身をわめく言を待り彼壯士詞を放ち
 過刻よりの應答仔細と羨りゆひぬ鷹を殺せし科人の斯
 某にていぬれとて両肌とわぐと見ふ弓手の脇より馬手
 一文字と切てられれば兩人ともに驚ろろ様子ゆめと尋ぬ
 其許の宣ひぬる五十拙と名乗播磨の執士とハ則某我知る
 父母しわかれ見る者し兩人井関十内公と養育せられし
 十内公病死の後相公乃押さうと以し門人数馬と娘子と
 娶て十内と名乗せし兄左門の謀悪某ゆりて妨げ
 と申思ひらん梶子りんとし十内公と某と諍しぬるり十内公
 是とさるし某と密り召も家の秘書し金子とてく某し

退くべしとの差圖し任せ此地小来を奉仕し其後剛井関
 の騷動敵とつう々兄左門今一人ハ恩人の息女討り討も無念と
 忍び十内公の有縁と知りハ秘書と渡して切腹せんと覚悟と極
 めりひしに不意も今日只今十内公の嗣子り秘書と返濟仕
 ん犬死致とも覚悟する小恩人の嗣子乃身に代り孝子の罪と
 償ひて爰り死しとて某が望所しゆるれ鷹を殺せし科人ハ
 五十拙陸治良と仰しれ浦太良君其許も命と金も本意を
 達し二人の孝とまわれゆくとく腹帯し結びて傳書の
 一卷取出し浦太良の前し置り是取んとばくもせし人
 伸して呆著と座し居るに兩人ハ面と對し鈍すし死あり
 るまば松太夫あし寄るやく一巻と戴し泪と流して



之りりらハ旁々の義心と聞ふ付ても此痴漢より老乃身此朽朽こそ
 推量つと彼に渡らば此傳書も瓦石ふ等しくくはふ頼らる友之助
 公へ譲りやせんとい入りこい思ひよるべいれ敵ふ縁はる陸治
 殿の手より其傳書受んやうハいりりど其許鬼も角をせさせ
 いととと許諾されば是も又断りわりとて竟小松太夫納め
 おさてられを友之助も今ハ陸治良乃つり任せ敵の弟とハ
 言るがう兄の似ぶる義心と感へ殿の鷹と殺せし科人も
 せば我等が望も全ふ大死るぬ其許の隠徳心よく成併
 あととして松太夫諸とも唱名とるに陸治良心よげ小打笑く
 掌と合しつ西へ迎へ息絶とる斯て友之助ハ一張の駕と備准
 一散と抱棄つ松太夫よりいりりぬと告げ館とさうさく立帰りぬ

曰奥村正信公ハ秘蔵の鷹なりとてとも鳥獸より人命を
 代る事や有とて陸治良の切腹と一入おしせられ厚く
 葬らせ玉ひらるよ一是ハあま此神紙の偏預りさうさく
 ハ又丁敷の重くと厭ひくもさうさく

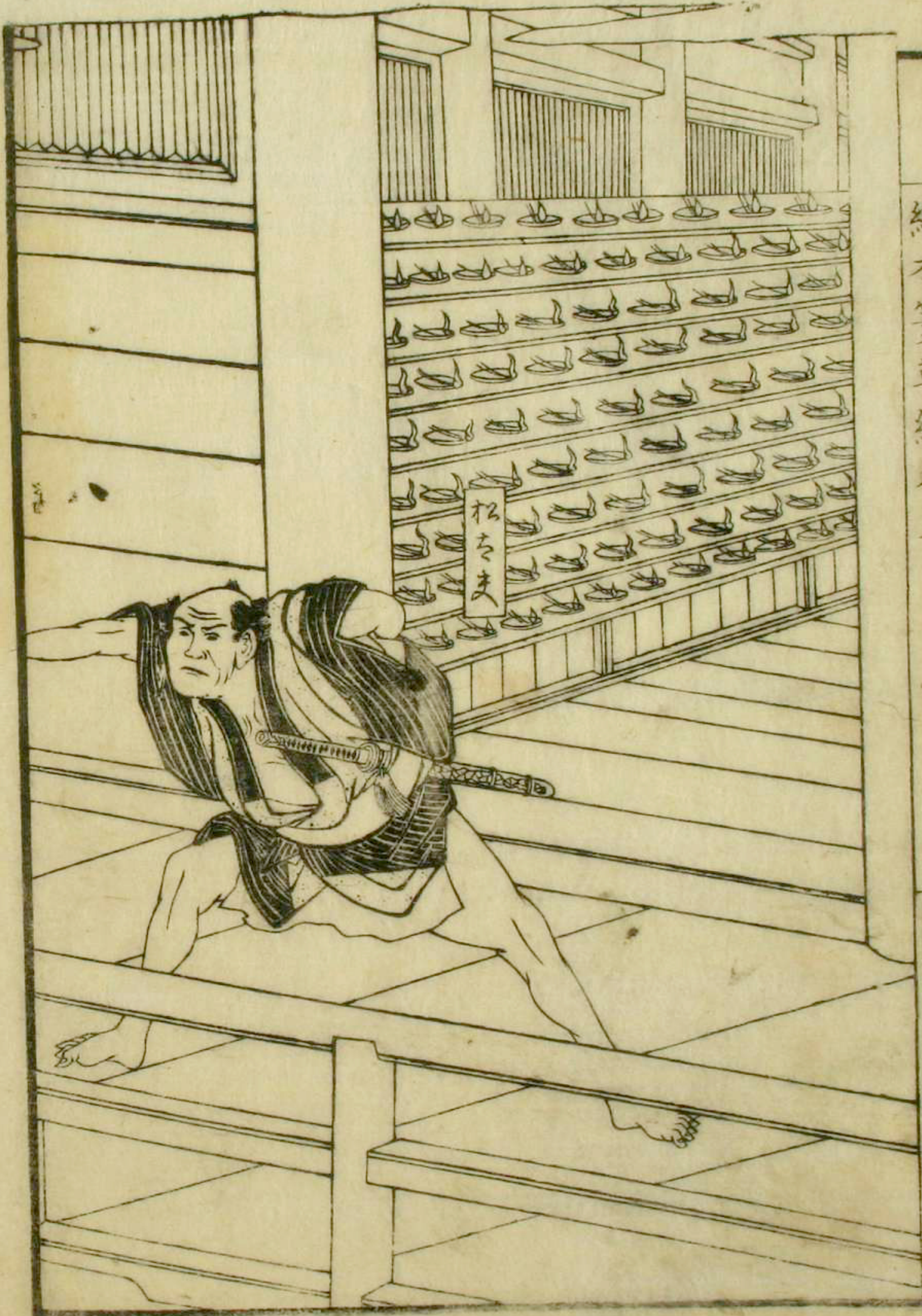
摂津の國補陀洛山惣持寺ハ西國第廿二番の札所ふして本尊十二面
 觀世音ハ世々靈驗つとて種々の誓願空しくかた別て疾
 病と祈り其驗著明此尊に誓願するに三百三十九燈と献ト三七
 日の間念むるふ其灯乃消されバ万一つも願成就せばとつこと
 かり高濱松太夫も平常に此尊と念ト奉るバあまび浦太良が
 暗愚るると歎て貧窮の身ふして大願とおろし身と勞し食と
 減じて油と調へ三百三十箇の燈明と献ト日夜毎々詣り灯の

消くずくとカカとと一心しん念ねんト奉ほうるに折やととて灯ひの半ま消くる夏なつのなつもど
 大おほ悲かなと不成な就じゆのなああと成なると思おもへども尚なほ一心しん念ねんト祈いの念ねんトと日夜にち念ねん
 今いま夜や参まゐ龍りゆうせんと近きん隣りん浦うら太た良らと預よ置お用ようの夏なつつりて他た小こ雀さつと
 誓ちかの専せん一いつととんんももはは是こゝ又また頗すこる心こゝろと勞う一いつ漸しん今いま日にち三さん七しち日にちの満まん願げんかれれど
 今いま夜や参まゐ龍りゆうせんと近きん隣りん浦うら太た良らと預よ置お用ようの夏なつつりて他た小こ雀さつと
 偽いつはりり妻つま籠かごももいいややとと歸かへららざるにに出でて惣そう持ぢ寺てらより堂どう内うち入いりて
 一心しん不ふ乱らん心中しんちゆうに祈いの誓ちか一いつ密ひそく普ふ門もん品びんと讀よ誦じゆ一いつ眼まなこを閉とめめて歡くわん念ねん
 と次つぎ弟あにに夜よ更さら雨あめささ降ふりて物もの凄せつく吹ふ風かぜふりや御ご燈とうの消くえや
 十じゅうん消くええののとと信しんと見みるる小こ怪あやしし俗さくと笠かさと思おもへへと
 藁わらりて造つくりししものの試し裁さいををととれれる高たかき足あし駄だと履はき破やぶ
 衣ころもの裾すそ高たかくかかげ弓ゆみ手てにに一いつの臺たいと携たづなへ御ご燈とうの前まへに歩あるる

松まつ太た夫ふ透と見み見みるる殊ことごと勝かちるる誰たれ人ひとの意いををゆゆててははぐぐふふととががたた
 くハ觀くわん音おん大だい悲ひの化け身しんああややと腫はれと極ごくめめ見みるる油あぶらと足あしののつつ
 ばして土つち器けを取とり携たづなへへ壺か小こ傾かたけけ猶なほ其その先まへへへと歩あるる行ゆく初はつめめに
 御ご燈とう列りつととしして次つぎ弟あにくくと消くええるるとと松まつ太た夫ふ忽たちち怒いらり心こゝろ頭あたまに発はつ
 憎にくと曲まが者ものごござざんんとと信しんと出でるる物ものももいいややとと後あとよりよりひひと
 抱かかく曲まが者ものハハろろりりややとと死し遁にんままんととすするるに動うるるハ油あぶらかかれれる散ち乱らん
 もれハ足あし踏ふ止とままずず両りやう人にんともとも撲た地ぢ倒たおるるに松まつ太た夫ふハ准じゆん備びの短たん刀とう拔ひきき
 ここちち左ひだりの脈いんととららとと突つききととままるるに逃にげげるるに逃にげげるるに逃にげげるる
 猿さる臂うでと延のびびて楚そととひひるる小こ冠かんりり一いつ笠かさハ落おちち散ちりり折やりりもも雨あめも晴はれれば
 御ご燈とうの光ひかりににままるる見みるるに言こと語ご同どう断た此こゝ曲まが者ものハ是こゝ我わが妻つまたりり離はなれれハ又
 夫おと松まつ太た夫ふと見みるる懺ざん愧がいて言ことひひるる松まつ太た夫ふハ熱あつ腸ぢゆう不ふ冷れいく我わが推お量りやう小

違つど浦太良ハ某ガ孫なる母ハ汝とやうし然中の沖津の孕し子
 おもバそれと去らせば只金の代りに預りし子とむり言聞せ育
 つけし人並るぬ痴漢カもバ併ニ誓て捧げし灯消るハ頼の
 叶ふぬあしと思ひるがうも何卒して佛の納受と無理な頼ひ
 二年老し身の油と絞り御燈の油代ての大願をを鬼くしこ
 汝乃為小油盗盗せぬ消る灯と佛の納受をさごとと思ひ頼も
 網もあつりしに満願の今夜し至り汝の所為の願りしハハ
 併乃見捨玉りぬ有難さ常言ふも七人の子はるれとも女肌と
 ゆるすさしと此事去してハまらぬ子れ夫程まで憎さりのう
 かさし死心く隠して祈る孫の願とやめて計知り忍び来りて
 妨るハ浅く死執心かとして輪廻て突倒るハ難ハ苦しと遠途

あつりし情多死詞し侍りかも彼孤ハ沖津の子と守り疾より知
 て侍も仔細小語り玉りぬハさる中此妻史と知らぬ体あ
 育しに類もる死痴漢カれど良人の心中推し侍りて泣て送り
 此年月此ころ人の噂と聞り浪花小不思議の名医つて如何不
 の難病くくも全快もつややうと此医師頼るバ痴漢も
 治るまりやと思ひあつても口惜も其日乃糧も乏し死我
 野全少し此準備もしてを医と頼ん便看もるしと思折
 も誰人の何乃頼り多くの御燈つらつらエび油の盗賊余野
 願の有りのと妨けるんと思ひあつても盗る油の其主ハ我
 夫ハ白浪の罪ハ目前佛の庭誓乃細にりくとも妻ガ一心浦
 太良も還着し本心ようとてやいとて刃と我手小持を咽腕



繪本實草紙卷五

三

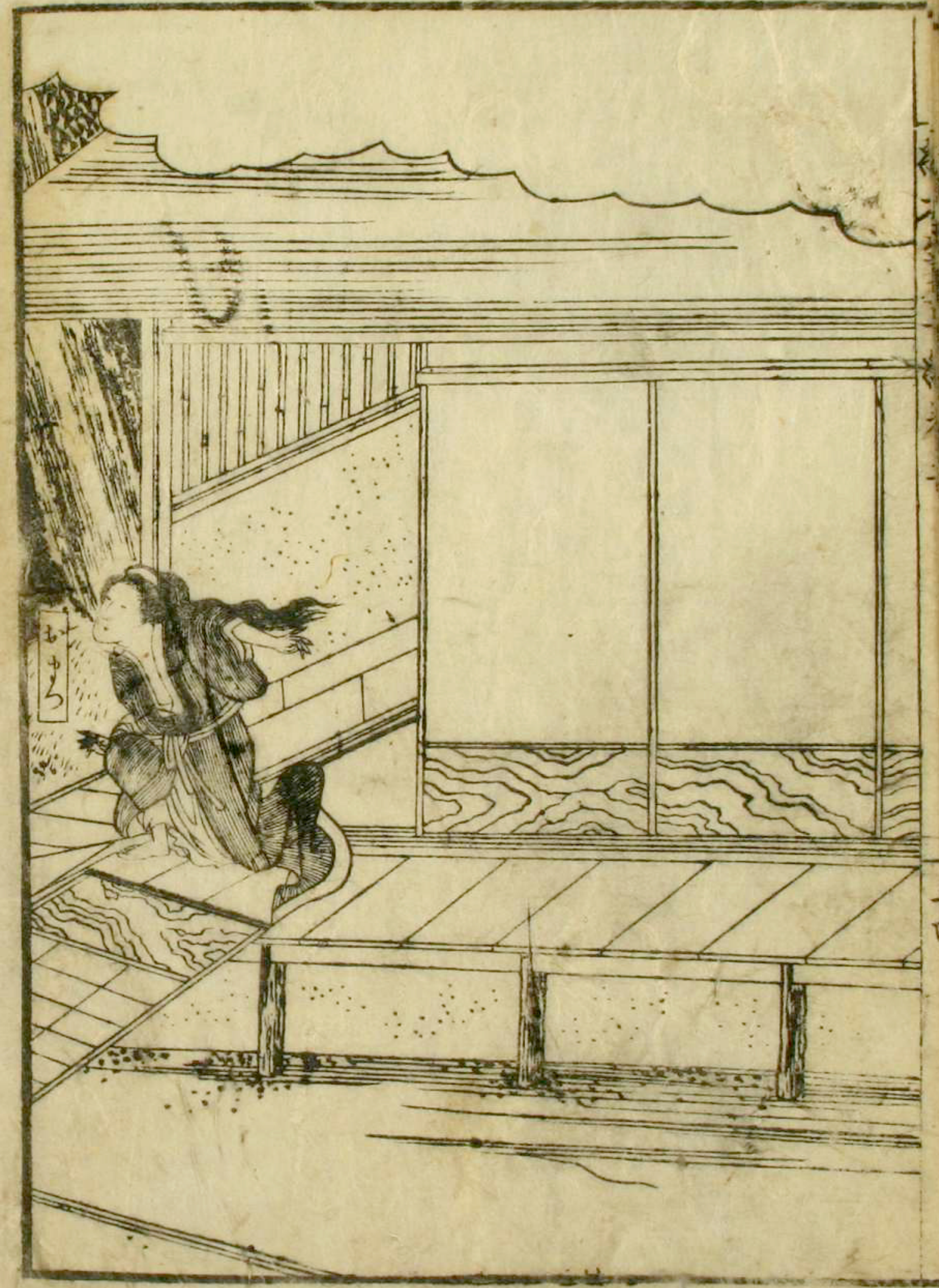
と突貫と忽ち息の絶ると知れり一團の燐火陰と燃上り南の方
 へ飛行ぬ松太夫大驚と火の行方と跡を忙然とて立ち上り
 りるに月落鳥啼て物の文理も見一分も見答められりと釵と納
 め軀の上の物覆ひるすに友之助浦太良乃兩人喘々馳来り
 め小松太夫を怪しめて思ひけり何由爰へ来られ
 と問り友之助とて昨日館へ歸りてより何れを忠事と
 調へ主人と暇と乞得くゆくと貴宅に立越敵を尋めんと
 高議ともるんと只今やう合りし北の方より一團の燐火飛
 来りて門へあを色し浦太良殿の懐に入と見し江阿と叫び
 てのけさぬと倒る成驚とながく水とそそ死今抱をり
 忽ち正氣付とげり常小替りてゆく冷刺言ずり慇懃

ふく刺し其許の是に在とありて急を迎へ来らんとの事り
 中同道りてゆくと浦太良も禮を改め友之助公の介抱と
 預り誠と夢のさめたる如くふい老婆り早空とてかを玉
 ひめや勿より慈愛養育せし一日の孝と別と奉つ
 更の勿体るとして落涙敷行り及びりて言て返らず昨日
 の物語とありひ出ると某が父母八人の為不害せられぬと
 今ハ一日も猶豫とて野より代急と敵と尋出り修羅の言
 執と暗さを奉らんと語り松太夫勇と悦びさてハ離が死期
 として詞の如く魂魄浦太良小還着せりよとて友之助浦太良
 度の大願離の行状も仔細と語りてや敵討の準備せり
 離乃軀とて荷ひ我家へ歸り葬式せり

友之助ハ縁巖院小徑ニ梅溪和尚に對面一松大夫ニ巡り逢一夏
一五十一と語りて磯辺と伴ひ歸らん由てつづ梅溪も喜びし之に去
よりの行状々々語りて磯辺と伴ひりて本意と達しらる
るバ再び面會を乞ふとて貯へ黄金と与らるに辱さすを
述つ磯辺と將々惣持寺ニ歸り松大夫對面させらるに互々先急
と喜びたり扱浦太良元服させ松大夫ハ宿ニ残しぬと友之助
浦太良磯辺の三人日と撰え發足を不思議するぬ一團の陰火先
立ちくわくわく三人を導くが如くなるとは是正しく籠が靈鬼
めと喜び勇ら火の行方めを随ひ行ぬ
曰く摂津中山の火ハ兩夜ニ山寄より出て中山より
前生りて盗る油を乞ふと言傳へ是金一籠

崎ニ在て惣持寺に居とらる油を盗んで松大夫ニ殺さ
燐火とらるる木文なると後世誤つて中山とらるる
爰ニ江加膳野の町ニ鮎屋源五良とらるる酒店よりて川魚と料理
一頗る家富榮へり妻とお松と呼て本伊勢古市の妓婦を
と價出して妻とせりお松生質生徒ありて平常に源五良を忌
嬌ふとらるる賈出され身もれバせひかく夫と無さぬれども
密山以前客たり邊の濱我長兵衛と點合日夜長兵衛と遊
りれども源五良ハ斯とらるる過行ぬ或日鮎屋小五人の放蕩者
来りて酒肉飽す喰終り一人のりて我ハ近辺の者
今日石山小詣てのうらこ空腹及びぬまハ斯當家の世話
るぬ然るに算了すふ及んが互々囊中空しりれバ重祓て

繪本實業卷五



来らん時、集了をば、一言、源五良頭と播く思ひもかけぬ仰
 り、い、ま、ど、見、も、あ、ら、ず、客、人、達、る、れ、バ、即、金、が、ら、で、ハ、迷、惑、ぬ、准、備
 る、バ、初、め、お、ち、を、聞、つ、つ、ん、の、喰、つ、終、つ、て、の、断、其、意、と、得、ば、い、る、れ
 と、拒、ひ、と、澁、皮、ど、も、つ、つ、勃、誇、鉦、子、と、擲、ら、鉢、で、り、り、を、と、騷、動
 に、及、ひ、ぬ、成、次、の、間、一、聞、居、ら、る、客、士、情、と、入、ら、忽、ち、五、人、の
 澁、皮、と、し、ら、ず、く、檢、さ、ん、つ、つ、打、擲、に、と、ら、ふ、五、人、乃、者、ど、も、怒、り、
 が、ら、も、今、の、手、練、と、遊、易、一、口、が、ら、一、口、の、此、壯、士、ハ、是、誰、人、な
 る、バ、五、十、抽、左、門、つ、つ、ぞ、有、ら、る、猶、左、門、つ、つ、く、汝、等、と、出、去、べ、
 好、身、る、ぬ、者、共、ら、れ、ぬ、其、も、武、士、な、れ、バ、今、日、の、お、い、ぬ、如、何、程、あ、り
 と、も、取、替、遣、つ、つ、と、と、と、と、源、五、良、小、其、價、と、聞、て、酒、肴、錢、等、了
 一、ら、れ、バ、澁、皮、共、低、頭、平、身、一、と、思、と、謝、一、圍、ら、考、と、と、退、出、ら、る

是よりして左門源五良懇意と措き澁皮の来りし時、左門と稱し
 後、ハ、数、日、源、五、良、が、宅、に、食、客、同、然、り、居、ら、る、に、お、松、ハ、又、こ、の
 左、門、と、券、恋、一、密、小、排、と、め、ら、る、只、こ、の、好、む、道、ら、れ、早、晚、密、會
 度、重、ら、る、ぬ、去、程、一、初、め、小、密、通、せ、長、兵、衛、ハ、自、然、と、疎、く、成、り
 去、ら、ぬ、竟、り、是、と、知、ら、し、と、左、門、ハ、得、も、つ、つ、を、或、日、人、ら、
 折、と、伺、ひ、お、松、に、い、ら、せ、つ、つ、某、と、い、ふ、と、思、ひ、ぬ、也、此、あ、ら、
 大、津、よ、り、来、り、一、食、客、武、士、一、點、合、某、と、疎、ん、ど、ぬ、股、奇、怪、腰、
 咄、ぬ、今、日、来、ら、ぬ、別、義、と、い、ふ、に、邊、各、に、い、ら、ぬ、彼、武、士、と、共、小、こ、
 殺、さん、と、斯、消、備、せ、し、と、懐、中、よ、り、料、刀、と、取、出、さ、し、忽、ち、お、松
 一、計、と、か、し、ら、る、声、と、低、く、い、ら、せ、し、此、更、と、く、君、一、知、せ、ぬ、と、
 と、思、ひ、ぬ、と、い、ふ、折、を、と、恨、ら、ぬ、原、来、彼、男、と、好、ん、で、密、通、せ

身の上の為あるはかりと遁まがして後の枕とわづらぬまふ
 此頃天源五良此変と察せし見へんれども愚鈍乃源五良野全
 事と果を更つて是も又し此幸初もバ妾ありふり仕士
 妻が寐所より誘引入を密にあつせ侍人小忍入る一刀は差殺
 玉のバ夫も悦びて却て君との中逢事の自由するに時
 臨んで源五良も殺し玉り兩人互に殺害せしと被露し赤永
 君と契しん更の易かぶるに長兵衛ならやう大悦び
 そはよに謀るれ必時刻とあつされゆくとて我家とて立歸りぬ
 斯て或日お長兵衛が方へ行つ兼ての謀今宵にあそとて来て
 謀調ゆる脊戸と開き置ゆるんふ又妾も紗ひつて有つて

仕裸せゆらん事帛の物と取出けようも易かりぬべしと堅く約し
 て立歸るは長兵衛ハ身とかつあやう今宵を過ぎしとて鮎屋の
 裏辺に忍行り約し違ひを椽の戸乃開きつとバ灯は透し見
 る二人共し熟睡せしゆかきとバ声もあつ伺ひ寄るハ手練
 の武士もどぞ眼とさよさせるは仕損せんと差足なう一
 振りら咽のうらととととと突り起しんと身張りむをき
 も立ば猶るがう巡をとおねハ急ら声と放ち入るりあそぞ
 出ろくくと脊戸口をて駈出ると驚るを我りしとて
 肩の顔と見ると彼武士も主源五良なれど案に相違し
 逃起り左門侍とくけ入つ長兵衛が額より肩先うけく切さげ
 られバ其す倒を死してり源五良を引立見ると是こそや

締断しりぞりれりバり兩人ふたり互たがひニに切害きり可べクく一ひと体てい不ふりてあらず
 儉使けんし入い来き有ありしゆりゆり兩人ふたり争論そうろんししるる事こと濟すめめははおお松まつ左さ門もん
 ハは大だいニに悦よろこびび是こゝにに種たね俾まりりあらくく膠か柱ちゆうりりれれ

繪本蕒草紙卷之五終

